

02-030

先天性心疾患をもつ学童の学校生活と他者との関わりに関する子どもと保護者の認識

丸山 志帆、佐藤 奈保、中村 伸枝

千葉大学大学院 看護学研究科

【目的】

先天性心疾患の救命率は急速に向上し、かつては乳幼児期に死亡していた重症例も、大部分が乳幼児期に心内修復術を終えて就学するようになった。これらの子どもは学校生活の中で他者と関わる体験を重ね、自立に向けた力を培っていく。本研究の目的は、先天性心疾患をもつ学童期の子どもの学校生活と他者との関わりに関する、子どもと保護者の認識を明らかにすることである。

【方法】

研究対象：普通学校の小学3～6年生に在籍する、心内修復術を終えた先天性心疾患の子どもとその保護者

調査期間：2018年8月～9月 調査場所：X県内の小児専門病院

調査方法：子どもと保護者に対し、学校生活と学校生活に関連する他者との関わりについて半構造化面接を実施した。子どもの基本特性や疾患経過は診療録・看護記録より情報を得た。

分析方法：面接の逐語録から「学校生活」と「他者との関わり」に関するコードを抽出し、子どもと保護者の認識の類似性および相違性を検討した。分析は小児看護学研究者2名のスーパーバイズを受け、真実性の確保に努めた。

倫理的配慮：所属機関および調査施設の倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】

対象者の背景：対象は子どもとその保護者10組で、子どもの年齢は8歳8ヵ月～11歳11ヵ月、学年は3年生3名、4年生2名、5年生3名、6年生2名で、男子5名、女子5名であった。

子どもと保護者の認識の相違：子どもは体育や遊びの場面だけでなく、学校での日常生活場面でも疲労や周囲との差を感じていたが、保護者はそれを捉えていなかった。また、子どもは体育の授業や遊びの場面で負担を感じる時もあったが、自分なりに対応していた。保護者は子どもの運動面の葛藤を捉えつつも、以前の身体状態と比べて肯定的に捉える傾向にあり、さらに体育や遊びにおける子どもの様子を詳細には把握していなかった。友達関係について、多くの子どもと保護者は問題はないと捉えていたが、一部の子どもは軽度の困難を抱えており、保護者は子どもの友人関係の変化や困難を感じていた。

【考察】

子どもと保護者の学校生活に関する認識には相違があることが明らかになり、子どもは学校生活の中で感じている身体の負担や対応について、共有する機会が少ない可能性が示唆された。学校生活全体の経験について、子ども自身から医療者と共有し、経験を意味付けしていくことができるよう、子どもと医療者の関係形成が必要である。